

2003年5月朝日新聞に「弥生時代の始まりが、考古学の定説より500年さかのぼりそうだと、考古学界では戸惑いが広がった。研究結果が事実なら、古代史の枠組みを大きく修正せざるを得ないからだ」と、かなりセンセーショナルな記事が公開されました。一方で、「学会で発表する前に記者会見を開いて“教科書が書き換えられる、なんていうのはルール違反。…マスコミを利用して仮説を広めていくのはまずいと思う。…もっと内部で揉んでから発表すべきだ」と批判する人もいました。それから十数年、やよい塾でも新しい年代観が織り込まれた講義はありました。そして今回、宮本先生の原点に戻って資料を分析した丁寧なお話を聞きました。これからはこれを物差しに納得の聴講ができることでしょう。

縄文人男性の想像図

渡来系弥生人男性の想像図



この復顔図は講義のスライドにもあった縄文時代と弥生時代の倭人で、本や資料でよく見かけるものです。このようなイラストを見ると在地に居た縄文人は、弥生時代に朝鮮半島から渡来した人たちに席捲されてしまったと思われるのでしょうか。それともかつてはそのような主張が主流だったときがあるのでしょうか。今回のスライドには“朝鮮半島南部から**少数**の渡来人が北部九州へ渡来し、縄文人と交配した…”とあり、その他の資料にも“**少数**”の文字がついていることが多いです。このような説明から友人は次のように想定していました。一度の渡来は数人からせい

ぜい二桁になるくらいです。列島に上陸した渡来人たちは近くの縄文人の集落に保護され、縄文人と交配していきます。縄文人の集落も高々数十人くらいですが、周辺の集落は縄文人だけなので、それらも考え合わせると渡来人は(圧倒的)少数と言えそうだからです。ただ西日本に分布する縄文人の数が非常に少ないことから、この想定に疑問を感じ始めています。一度の渡来は少数でも、わりと頻りに渡来は繰り返され、上陸した渡来人たちは、縄文人との接触・吸収がなされる前に、新しく渡来した人々を迎え入れ、渡来人だけの集落が構成されていったのではないのでしょうか。復顔図をよく見ると左側が単に“縄文人”とあるのに対して右側は“渡来系弥生人”と限定されています。つまり、渡来系でない弥生人もいたわけで、例えば西北九州の弥生人は縄文人の形質を受継ぎ“縄文系弥生人”と呼ばれています。この人たちは在地の縄文人にもかかわらず、支石墓(墓墳上に大きな上石を乗せた構造を持つ墓)など朝鮮半島からもたらされた渡来系の文化を採り入れているのです。この場合でも、在地の集落数に比べれば渡来人集落は少数で、全体的にみれば少数の渡来人となるのかも知れません。でも、縄文集落もそれほど多くはなく、渡来人文化圏の拡大が優勢していたのではないのでしょうか。質問コーナーで現代日本語は弥生時代の渡来人によってもたらされた可能性が述べられました。これは在地の言語が置き換わってしまうほど、渡来人が多かったことを補足するのではないのでしょうか。しかし、宮本先生は新しい文化を在地の人に教える際に渡来人の言語を使って指導したから、渡来人の言語が日本列島に定着していったと考えられているようです。

雑誌『日経サイエンス』の8月号に下の図が掲載されました。2020年まで実施していた遺伝子検査サービスに集まったデータから1都道府県あたり50人のデータを、47都道府県で縄文人由来と渡来人由来のゲノム比率を解析したものです。

沖縄県で縄文人由来のゲノム成分比率が高く、逆に渡来人由来のゲノム成分が最も高かったのは滋賀県でした。沖縄県の次に縄文人由来のゲノム成分が高かったのは九州や東北です。一方、渡来人由来のゲノム成分が高かったのは近畿と北陸、四国でした。これらの結果は、渡来人が朝鮮半島経由で九州北部に上陸したとする一般的な考え方とは一見食い違うように思えます。上陸地点である九州北部よりも、列島中央部の近畿などの方が渡来人由来の成分が高いからです。弥生時代以降も、各地にまともに入植した記事が六国史に残っていて、混血の度合いもまちまちだったのかも知れません。

